

恋愛小説

今回のテーマは「恋愛小説」！
恋愛といっても、同じものはないくらい色々なかたちがあります。寒い寒い冬ですが、様々な恋愛模様に触れて、胸を熱くしてみてはいかがでしょうか。

そのメロディに魅せられて♪

「テリーのテーマ (ライムライト)」 (『アカデミー主題歌賞・音楽賞曲集』収録)
F2ア13801 篠崎ほか所蔵

この曲を聴くだけで、あの美しいラストシーンを思い出すことができる。生きることに絶望した若い踊り子テリーを勇気づけ、献身的な助けで立ち直らせた老道化師カルヴェロ。哀しい愛の物語と言われることが多いが、これもひとつの、きつとたったひとつの愛のかたちだったのであり、それを音楽で体現させた名曲だと思う。



『青い麦』

コレット著
集英社文庫
B953コ
篠崎ほか所蔵

幼い頃から兄妹のように育ってきたフィルとヴァンカ。16歳と15歳になり、なんとなく互いを意識し出した2人の前に、年上の魅力的な女性が登場し……。美しい夏のプルトーニュ海岸の情景と共に描かれる、甘酸っぱい初恋の物語です。ぎくしゃくする2人の関係にチクチクと胸が痛むのは、遠い昔の自分を思い出すからかもしれません。



『左京区七夕通東入ル』

瀧羽 麻子著
小学館
Fタ
篠崎ほか所蔵

文学部の大学4年生の花は、七夕の夜に理学部数学科のたっくんと出会います。今まで出会ったことのないタイプのたっくんやその友達と交流していくうちに、花はたっくんに惹かれていきます。しかし、この恋には難しい問題が……。恋と将来と自分のことと、学生ならではの悩みにぶつかり、もがく花の姿に「あ～青春だなあ！」の一言です！



『マイ・アントニア』

ウィラ・キャザー著
みすず書房
933.7カ
中央ほか所蔵

19世紀後半のアメリカ中西部。ボヘミアから移住してきた年上の少女アントニアと「ぼく」はともに子供時代を過ごす。一緒にいた間はいつも、「ぼく」の瞳の中にアントニアがいた。そして離れ離れになった後は心の中に……。一度も恋人同士にならなかったことのない2人。恋愛だとはどこにも書いていないけれど、「ぼく」のアントニアへの想いは愛でなくて何なのだろうと思いました。



『伶也と』

柳月 美智子著
文藝春秋
Fヤ
篠崎ほか所蔵

読み終わったとき、遠藤周作の言う「同伴者としてのイエス」という言葉が脳裏に浮かんだ。辛いときも悲しいときも、そして幸せなときも常に側にいるイエスの姿を、主人公の直子の中に見たのだ。この愛の形が全ての愛を凌駕するものとは思わないが、生身の人間が為し得る一つの究極的な愛ではなからうか。



『ちいさな幸福』

角田 光代著
講談社文庫
BFカ
篠崎ほか所蔵

日常生活の中で、恋人や好きな人と過ごした特別な思い出って、他の人にとってそれほど心躍るような出来事ではないのかな。そんな事に気づかせてくれる13編の物語たちと、読者100人への「最も好きなデートとは」のアンケート結果。他人には大したことでもなくても自分にとっては一大事という話ですが、読んでいてほっこり心が温まります。



『ほかならぬ人へ』

白石 一文著
祥伝社
Fシ
篠崎ほか所蔵

こんなにも苦しく、心が締め付けられるほど辛いのに、なぜ人は人を愛するのだろうか。今の自分の恋人が、真実、この世の中でただ一人の、自分の出会うべき相手だったのだろうか……。？ 打算などない本当の恋愛とは、そして“本当に大切な人”とは果たしてどうい存在なのかを問いかける、白石一文の直木賞受賞作。



『袋小路の男』

絲山 秋子著
講談社文庫
BFイ
篠崎ほか所蔵

高校の先輩であった小田切孝に恋した大谷日向子。彼女はその後12年間、指さえ触れることもなく、彼を思い続ける。2人の、近くも遠くもない距離感が絶妙で非常にもどかしい。同じ恋愛なのに、男から見た物語と女から見た物語とで、全く違うところが面白い。その部分が1冊の中でうまく纏められていて、とても奥深い作品。



『甚三郎始末記』 (『もう一枝あれかし』所収)

あさの あつこ著
文藝春秋
Fア
篠崎ほか所蔵

上役の娘・乙絵に失恋した醜男の甚三郎は、その反動で、乙絵に似た女郎屋のお里に入れ込んだ。ところが、ある事件によりお里は殺されてしまい、甚三郎はその仇を討ったのだが……。残酷な運命に弄ばれた甚三郎は、死の間際になって、本当に惚れていた女が誰であるか悟り、従容と死につく。その潔さに涙しました。



『イエステイズ』 (『FINE DAYS』所収)

本多 孝好著
角川文庫
BFホ
中央所蔵

病床にふせる父親から昔の恋人を探すように頼まれた「僕」。手がかりもないまま2人が暮らしたアパートを訪ねるが、そこには在りし日の彼らが暮らしていた……。現実という硬い壁と、泡沫のように消えてしまう恋の儚さ。父親のかつての恋人に寄せる「僕」の優しく、切実なモノローグが印象的です。



『たんぽぽ娘』

ロバート・F. ヤング著
河出書房新社
933ヤ
篠崎ほか所蔵

丘の上に立つ、たんぽぽ色の髪の少女。未来からやって来たのだという彼女と、妻子持ちで親子ほども年が離れた「私」は、運命的な恋に落ちてしまう。「おとといは兎を見たわ、きのうは鹿、今日はあなた」という出会いの台詞が美しい短編ですが、“あの2人は幸福になれたのか”という点で、当館スタッフの反応がまっふたつに分かれました。ちなみに私は「幸福になれない派」です。みなさんはいかがですか。